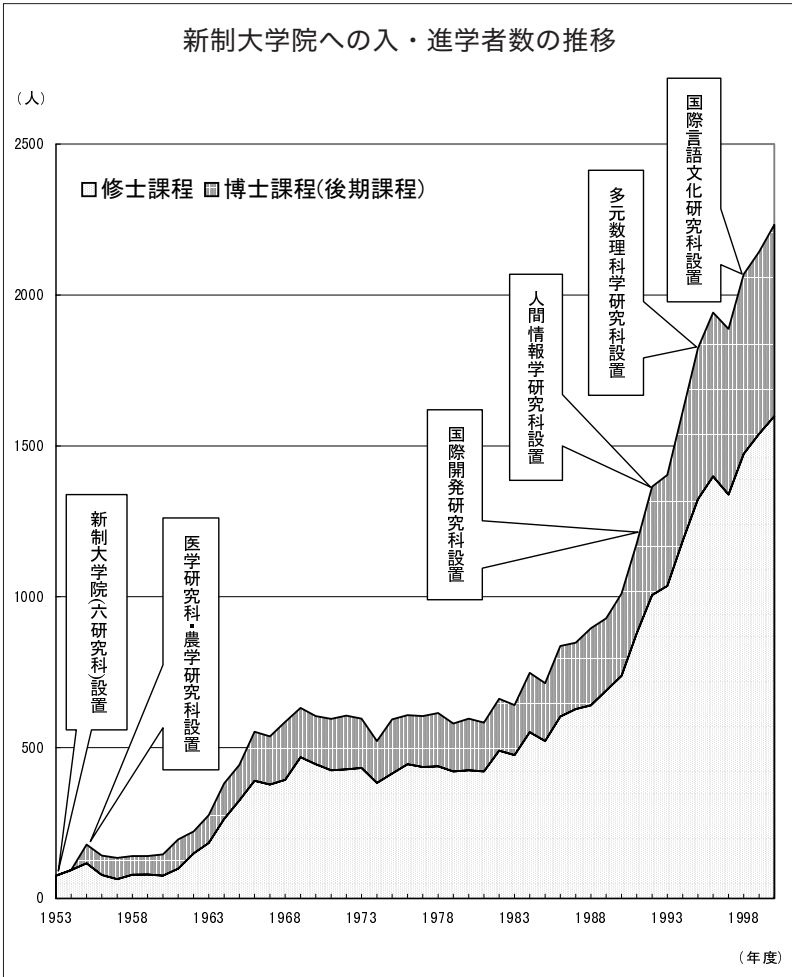


はじめに

二〇〇〇（平成一二）年五月一日現在、名古屋大学には約一万六五〇〇名の学生が在籍しています。このうち大学院学生（院生）は、全体の三分の一にあたる約五七〇〇名で、同年度の大学院入学（進学）者数は、前期課程・後期課程・博士課程のすべてをふくめて二二三三名となっています。戦後、名古屋大学をふくむいくつかの国立大学では、一九五三（昭和二八）年度から新制大学院（修士課程）が設けられました。このときの名古屋大学大学院への入学者数は七六名で、前期課程・後期課程がそろった一九五五年度における大学院入学者数をみても一七九名にすぎませんでした。この約半世紀の間に、大学院へ入・進学する学生数がおよそ二二倍増になっているのです。おなじ期間における学部への入学者数がおよそ三倍増であったこととくらべると、大学院への関心が大きく高まっていることがわかります。

本書では、日本における大学院の歴史を概説しながら、名古屋大学の大学院のあゆみに焦点をあててみたいと思います。ひとくちに大学院といっても戦前のものと戦後のものとは制度的な位置づけが異なっています。さらにいうとおなじ戦後の大学院でも、今日までのおよそ半



(『明日を拓く名古屋大学3』および『名古屋大学のプロフィール』より作成)

世紀の間にその性格が次第に変化していると思われます。そうした大学院の変化と大学院への社会的関心の高まりとはどのような関係にあるのでしょうか。そもそも大学院とはどのような目的で設けられたのか、どのような目的で設けられるのか、さらにはどのような目的で設けられるべきなのか、などの疑問に対して多少なりともヒントを提示することが本書のねらいとなっています。

一、戦前の大学院

◆帝国大学令と大学院

日本において、「大学院」とよばれる制度がはじめて登場したのは明治時代のことでした。一八八六（明治一九）年、日本最初の官立総合大学を生み出した帝国大学令が公布されましたが、そのとき「帝国大学ハ大学院及分科大学ヲ以テ構成ス」（第二条）と明示されたのがその始まりです。ただし、この帝国大学令によって制度化されたのは現在の東京大学の前身にあたる帝国大学一校のみでした。戦前期、日本国内には七つの帝国大学（東京、京都、東北、九州、